

学習動機が大学生の学習に及ぼす影響

相模女子大学 学芸学部 子ども教育学科
准教授 浅野 志津子

1. はじめに
2. 学習動機尺度の項目
3. 学習動機尺度と学習意欲の平均値
4. 2002年と今回調査の平均値比較
5. 学習動機と学習意欲の関連
6. 将来の見通しの3群(1.理解・実行 2.理解・不実行 3.不理解)による学習動機・学習意欲の平均値比較
7. 将来設計の高低による学習動機・学習意欲の平均値比較
8. どのような学習動機が将来設計と学生生活の充実に影響するのか
9. どのような学習動機が授業・実験への参加時間数とその貢献度および勉強時間数とその貢献度に影響するのか
10. どのような学習動機がどのような能力向上とマインド形成に影響するのか
11. 各学習動機が及ぼす影響についてのまとめ

1. はじめに

人間が自己のもつ能力を活用して自分らしく生きていくためには、学校でさまざまなことを学び、その時その時を大切にするとともに社会に出てからも役立つ資質を向上させなければならない。大学全入時代を迎えて大学は誰にでも手が届く場になった。しかし、「馬を水辺に連れていくことはできるが、水を飲ませることはできない」と言われるように、学習の場に身をおいてもそこで自発的に学ぼうとする心構えが本人になれば知識を身につけ、自己を成長させ、社会で生きていく力をつけることができない。なぜ学ぼうとするのか、その理由は人それぞれであろうが、いくつかは大別し、どのような学習動機がどのように役立つのかを把握し、学生指導に役立てることが必要である。将来のキャリア形成を支援するための授業およびプログラムを用意するだけでなく、学生個々人が学びに臨む心構え、すなわちどのような学習動機をもって学びの場に参加してどのような学習成果を得ているのかを明らかにし、意識改善を行うことが、学びの場で提供されているものを最大限に活かしていくために有効であろう。

2. 学習動機尺度の項目

本分析で使用した学習動機尺度は、浅野が開発した尺度である(出典:浅野志津子(2002). 学習動機が生涯学習参加に及ぼす影響とその過程—放送大学学生と一般大学学生を対象にした調査から—。教育心理学研究, 50, 141-151.)。この学習動機尺度は予備調査として一般の5つの大学の学生126名と放送大学学生106名に学習動機について自由記述の質問紙調査を行って項目を収集し、本調査で一般大学と放送大学学生計879名を対象に質問紙調査を行い、因子分析の後、信頼性と妥当性を検討して作成したものである。放送大学学生を対象に含めたのは、生涯学習社会といわれる現代において勉強に熱心な社会人学生の学習動機についても検討するためである。学習動機は、友人作りを目指している「交友志向」、自分を高め、幅を広げたいと自己の向上を目指している「自己向上志向」、自分の経験の中から課題を見つける「経験関与的課題志向」、なりたい職業や高い専門性を身につけたいと考えている「職業・専門性志向」、特に学びたいものがある「特定課題志向」の5つの下位尺度をもつ。今回の大学生のキャリア意識調査2007においても、各下位尺度の内的整合性を示すアルファ係数は「交友志向」

が.93,「自己向上志向」が.89,「経験関与的課題志向」が.84,「職業・専門性志向」が.80,「特定課題志向」が.77であり,各項目は互いに十分な関連があり,下位尺度としての整合性があると判断できる。各下位尺度の具体的な項目は下記に示す。

また,どのような学習動機をもつ人が積極的に学習をし,将来にわたって学習を継続しようという意志をもっているのかを調べるために,学習意欲を測定する尺度も構成した。現時点でどのくらい学習に積極的に関わっていると自分で思うかを表す「積極的関与」と長期的に学習を続けようとする「継続意志」の2つの下位尺度から成る。今回の大学生のキャリア意識調査 2007 におけるそれぞれのアルファ係数は「積極的関与」が.84,「継続意志」が .79 であり,十分な内的整合性を示した。各下位尺度の具体的な項目は下記に示す。

学習動機の5つの下位尺度

交友志向

- いろいろな人と出会えるから
- 多くの人と交わることができるから
- 新たな友人を作ることができるから
- 楽しそうな場だから
- 人間関係が豊かになるから

自己向上志向

- 視野を広げたいから
- 自分を高めたいから
- 幅広い教養を身につけたいから
- 自分の幅を広げたいから
- 物事を多様にみることができるから

経験関与的課題志向

- 日常的に接したことに興味をもったから
- ふだん,疑問に感じたことを勉強したいから
- 日常生活でみたり,聞いたりしたことについて学びたいから
- 新聞,雑誌から,興味がわいたから
- 自分の経験と知識が融合すると興味がわくから

職業・専門性志向

- なりたい職業や,資格のため
- 高い専門性を身につけたいから
- 現在関わっている活動や仕事上,勉強することが必要であるから
- 自分自身が関わった活動や仕事に関する事柄を学びたいから
- 経験を裏付ける専門的知識がないから

特定課題志向

- なんとなく勉強しているだけだ(逆転項目)

- 義務的に勉強している (逆転項目)
- ほかにやりたいことがなかったから (逆転項目)
- 特に学びたいものがあるから
- 興味ある分野を学びたいから

学習意欲の2つの下位尺度

積極性関与

- 自分では、学習意欲は高い方だと思う
- 自分では、積極的に学習していると思う
- 勉強は好きである

継続意志

- できるだけ長く勉強を続けたい
- 常に学びたい気持ちがある

3. 学習動機尺度と学習意欲の平均値

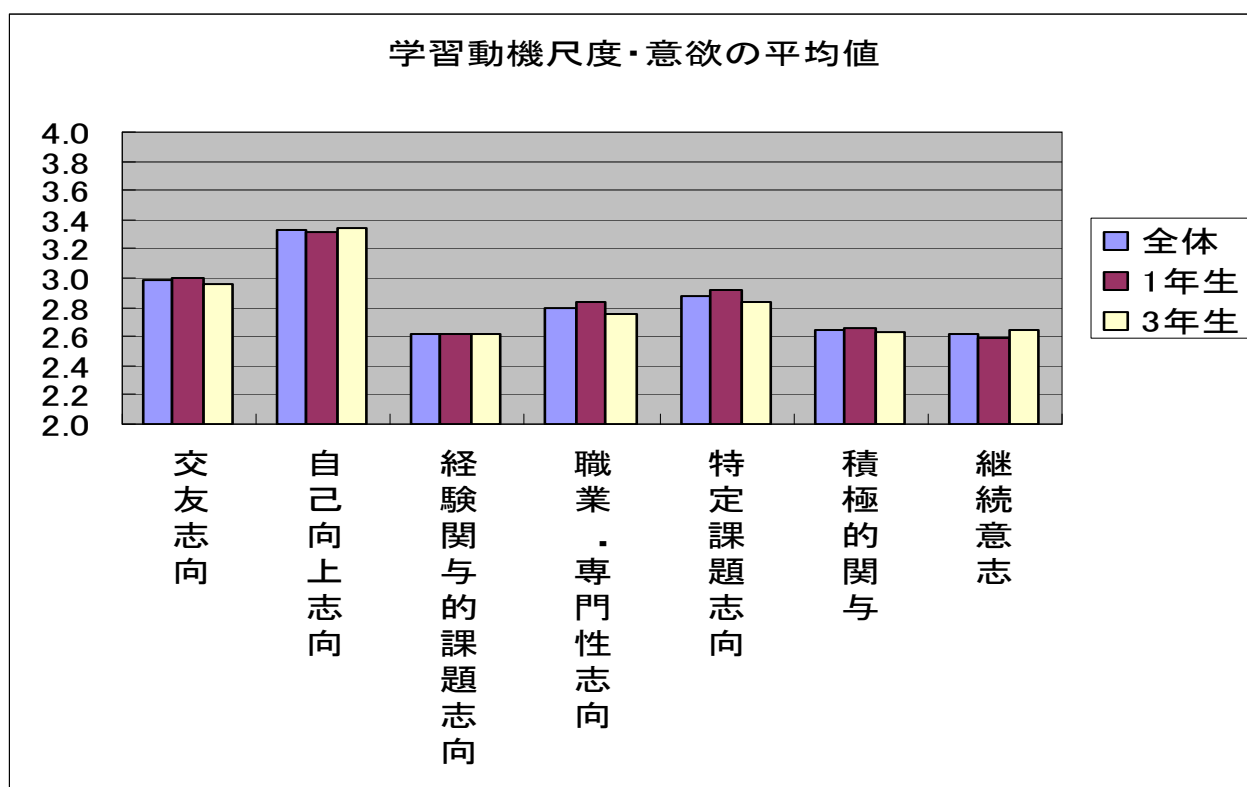


図1. 学習動機尺度・意欲の平均値

各尺度は4件法で、各項目ごとに「あてはまらない」を1点、「あまりあてはまらない」を2点、「ややあてはまる」を3点、「あてはまる」を4点とし、点数が高いほどその項目に対する肯定感が強いように配点した。各下位尺度に属する項目の平均点をその尺度の得点とした。

図1に示したように、学習動機のうち、平均点が一番高かったものは「自己向上志向」であり、1年生と3年

生を含めた全体では3.3であった。その次は「交友志向」で、全体で3.0であった。学生たちは視野を広げ、自分を高め、幅広い教養を身につけたいと考えて自己を向上させるために学習している。また、「交友志向」が高いことから、学習をするときの人間関係も重要であることが分かる。

1年生と3年生を比較すると学習動機のうち、「職業・専門性志向」と「特定課題志向」が1%水準で有意差があった。「職業・専門性志向」の平均値は1年生が2.84, 3年生が2.76で、「特定課題志向」は1年生が2.92, 3年生が2.83であった。いずれも1年生の平均値の方が3年生よりも高かった。本来ならば、3年生になって就職活動がこれから本格的になる時期において、3年生の「職業・専門性志向」が1年生よりも高くなることが期待されるが、逆に3年生が低いということは大学入学時当初に考えていた職業へのつながりに関する動機が時間を経ると薄まっているということであり、学年が進むにつれて職業に対する意欲がそれほど顕著ではないが後退している。また、3年生になってゼミなどでも自分のテーマを見つける時期になっているが、学びたい課題があるという「特定課題志向」も学年が進むにつれてそれほど大幅ではないものの後退している。他の学習動機は3年生の方が高いものではなく、統計的有意差はない。学習意欲として積極的な学習や学習継続を望む「積極的関与」と「継続意志」も有意差がない。3年生は1年生よりも5つの学習動機のうち、2つが低く、他の3つおよび積極性や継続性を表す学習意欲が横ばいであるということは大学に入学後に学習動機と意欲が高まっていくということがなく、現状維持か下降線であるという状況を示している。

4. 2002年と今回調査の平均値比較

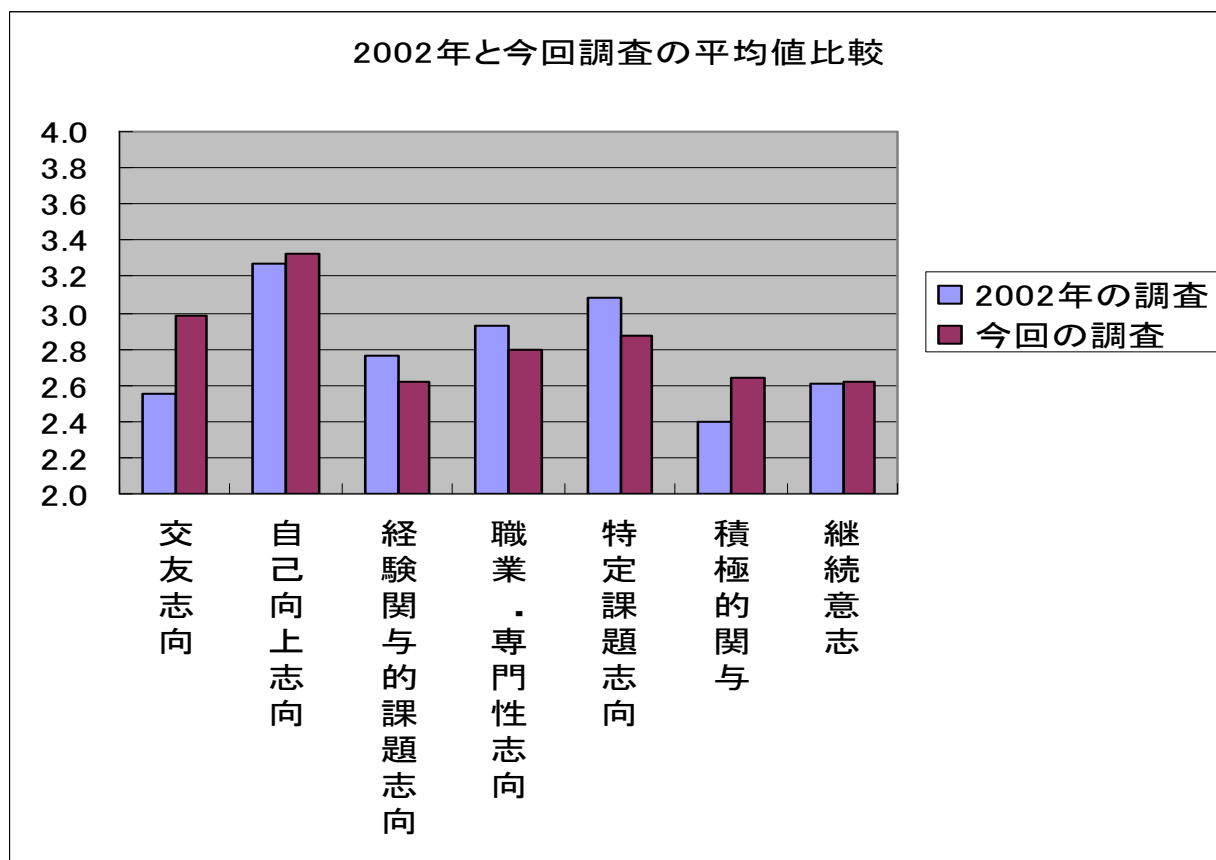


図2. 学習動機と学習意欲に関する2002年と今回調査の平均値比較

図2は、2002年に国立3大学、私立5大学の学生381名を対象にした調査（浅野，2002）と今回の調査の平均

点を比較したものである。学習動機のうち、「交友志向」は2002年が2.55、今回が2.98、「自己向上志向」は2002年が3.27、今回が3.33、「経験関与的課題志向」は2002年が2.76、今回が2.62、「職業・専門性志向」は2002年が2.93、今回が2.80、「特定課題志向」は2002年が3.08、今回が2.87であった。学習意欲に関しては「積極的関与」は2002年が2.40、今回が2.64、「継続意志」は2002年が2.61、今回が2.62であった。

今回の調査の方が2002年よりも平均値が高くなっているものは、「交友志向」「自己向上志向」「積極的関与」である。「自己向上志向」は平均値差はそれほど大きくないが、いろいろな人と出会え、楽しそうな場だからと考えて学習する「交友志向」と自分で学習意欲は高い方だと思っている「積極的関与」の平均値は今回の方がかなり高くなっている。そのほかの3つの学習動機は2002年よりも今回の調査の方が平均値が低くなっており、将来にわたって学習を継続しようとする「継続意志」はほとんど変化していない。同じ項目を使用した2002年の調査と今回2007年の調査では調査対象者の募集方法が異なるので一概には言えないが、ひとりで自宅で学習に没頭するのではなく、多くの人と出会って人間関係を豊かにし楽しい場で学習したいという考えが強くなっており、自分では積極的に学習しているという自己評価は高くなっていることが窺える。日常的に接していることへの疑問など経験の中から学びたい課題を見つけたり興味ある分野について学びたいと考えたりあるいは職業や高い専門性のために学びたいという学問の内容そのものにかかわる学習動機は少なくなっている。5年間の経年変化をみると5つの学習動機のうち、交友関係を重視する学習動機のみが強くなっており、学習内容あるいは職業準備を目的とした学習動機が減少している。5年間で学習そのものに対する動機は下がっているが、学習への積極性が高い方だと考える傾向は逆に強くなっている。しかし、この学習への積極性は自己評定なので、実際に現在の学生の方が自発的に学習しているかどうかは授業への参加や学習時間の比較など他の項目を含んだ調査を行い検討する必要がある。

5. 学習動機と学習意欲の関連

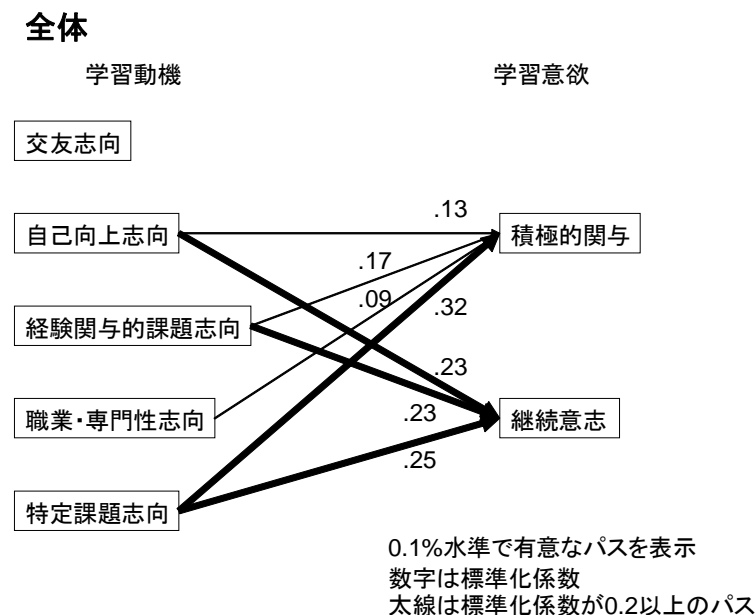


図3. 学習動機が学習意欲に及ぼす影響(調査対象者全体)

1年生

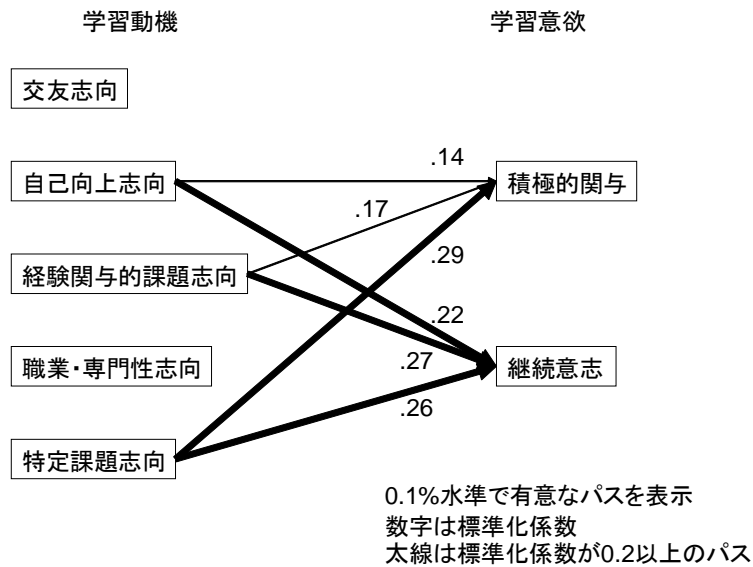


図4. 学習動機が学習意欲に及ぼす影響(1年生)

3年生

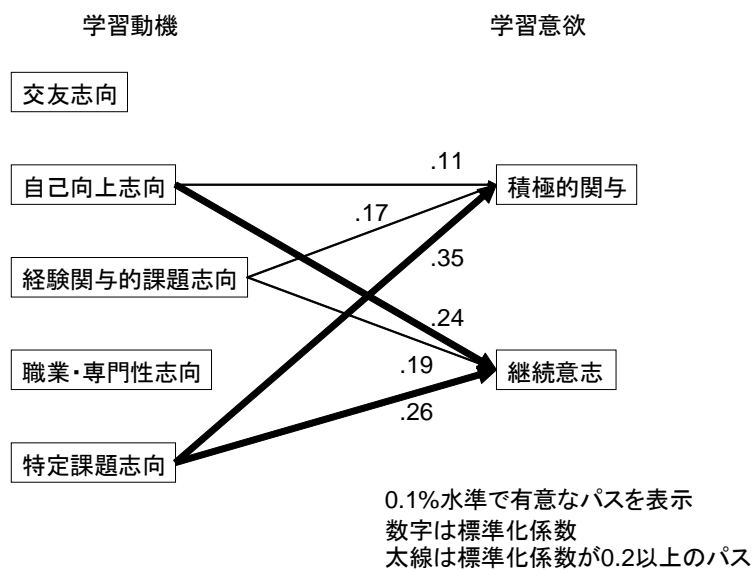


図5. 学習動機が学習意欲に及ぼす影響(3年生)

どのような学習動機が高い人が学習に積極的に取り組み、学習を継続しようとする意志が強いのかを調べるために、5つの学習動機を独立変数にし、学習意欲を表す「積極的関与」と「継続意志」を従属変数にし、重回帰分析を行った。調査対象全体、1年生、3年生の結果を図3、図4、図5に示した。

全体では、主に学びたいことが決まっている人の方が積極的に学習をしていると自己評定をしており、自己を向上させたいと考える人、経験の中から学びたいものを見つけている人、興味あることを学びたいと考えている人は学習を継続したいと思っている。1年生と3年生も全体の傾向とほぼ同じであるが、1年生の方が学びたいことが自分の経験に根ざしている学生は学習を継続したいと考える傾向が強い。

6. 将来の見通しの3群 (1.理解・実行 2.理解・不実行 3.不理解) による学習動機・学習意欲の平均値比較

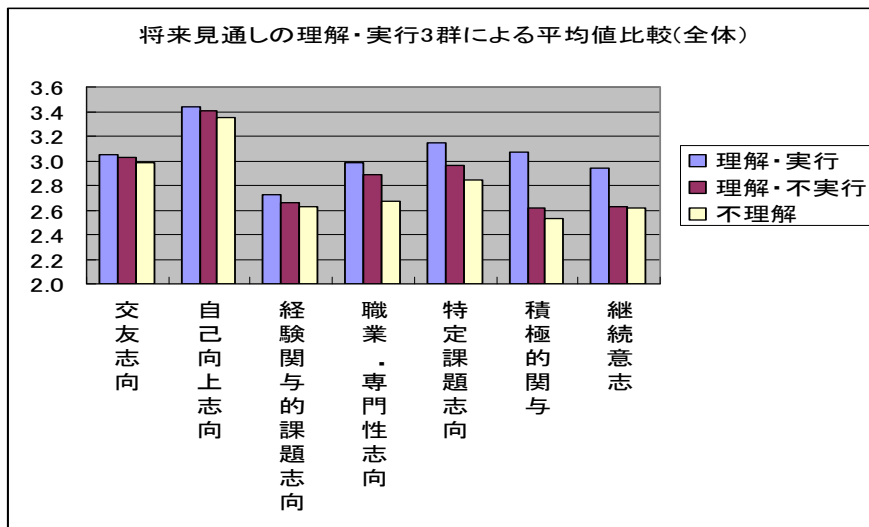


図6. 将来見通しの理解・実行3群による学習動機・意欲の平均値比較(全体)

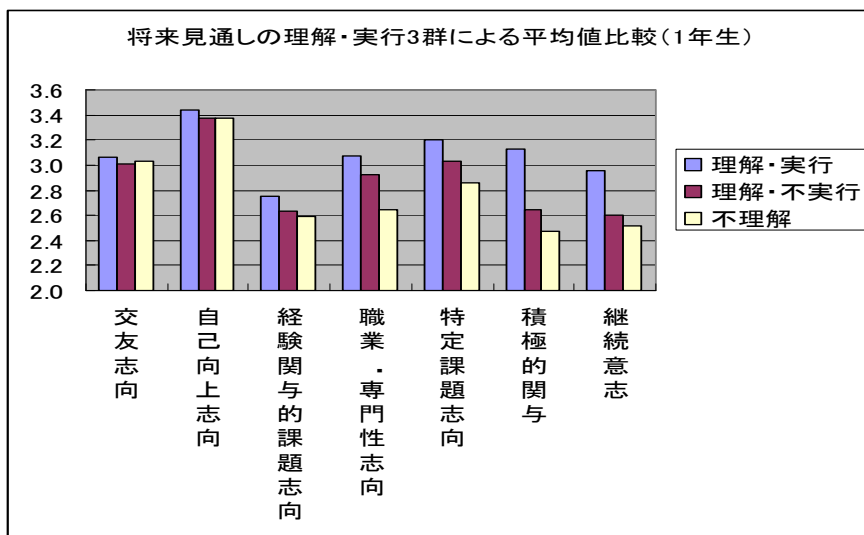


図7. 将来見通しの理解・実行3群による学習動機・意欲の平均値比較(1年生)

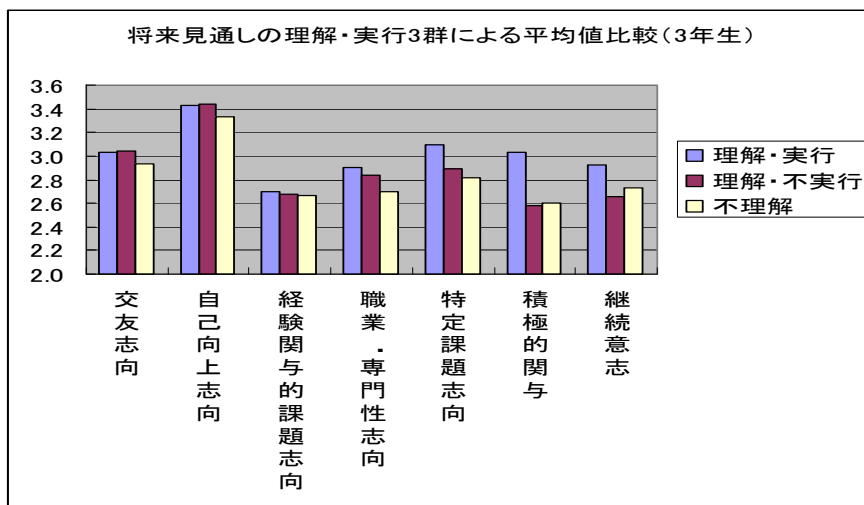


図8. 将来見通しの理解・実行3群による学習動機・意欲の平均値比較(3年生)

将来の見通しの実現に向かって、何をなすべきか理解し、実行している群（理解・実行群）、何をなすべきか理解しているが実行はできていない群（理解・不実行群）、何をなすべきか分からない群（不理解群）の3群の学生間で学習動機・意欲が異なるかどうかを検討するために、一元配置の分散分析を行い、平均値の比較をした。図6に調査対象の学生全体、図7に1年生、図8に3年生の結果を示した。

1年生、3年生ともにほぼ同様の結果であるため、全体について説明する。学習意欲を表す「積極的関与」と「継続意志」は理解・実行群は理解・不実行群と不理解群よりも5%水準で有意に平均値が高かった。すなわち、将来の見通しを実現するために何をなすべきか理解してかつ実行もしている学生は、何をすべきか理解していても実行していない学生やすべきことも理解していない学生よりも、積極的に学習し、また学習を継続しようとする意欲も高いことが分かった。学習動機に関しては、「職業・専門性志向」と「特定課題志向」の平均値が5%水準で有意に異なり、どちらの動機も理解・実行群は理解・不実行群と不理解群よりも平均値が高く、理解・不実行の群は不理解群よりも高かった。言い換えると、将来の見通しの実現のために、なすべきことを理解し、実行している学生は積極的に学習し、将来も学習を継続しようとし、なりたいたい職業と専門性を高めるために学習し、学びたい学習内容も定まっている。

7. 将来設計の高低による学習動機・学習意欲の平均値比較

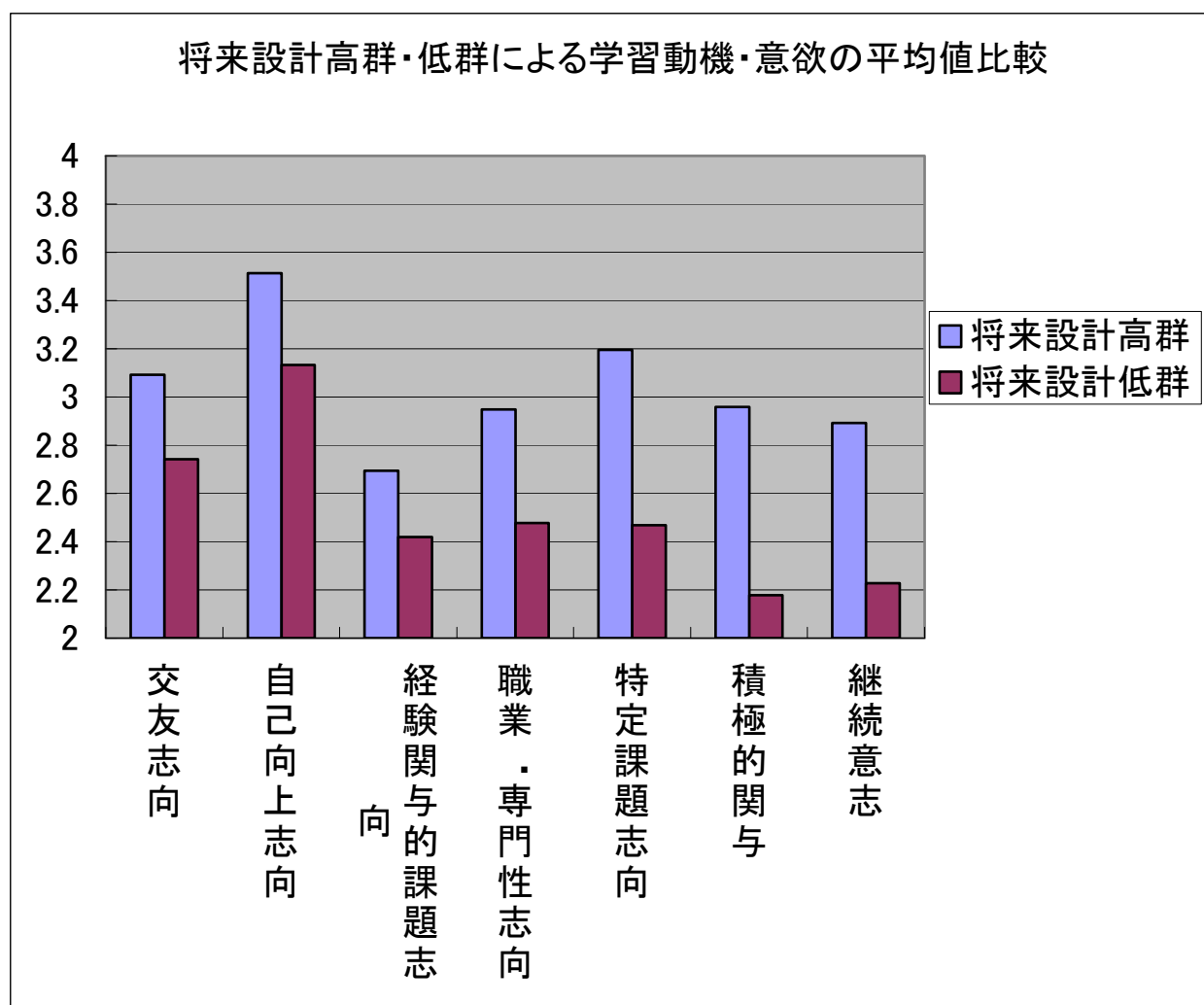


図9. 調査対象者全体での将来設計高低2群による学習動機・意欲の平均値比較

将来設計に関する5項目「私には、だいたいの将来設計がある」「将来のためを考えて今から準備していることがある」「私の将来はばくぜんとしていつかみどころがない(逆転項目)」「将来のことはあまり考えたくない(逆転項目)」「私の将来は希望がもてる」を将来設計尺度として平均値を尺度得点とした。各項目とも5件法であり、あてはまらない」を1点、「どちらかといえばあてはまらない」を2点、「どちらともいえない」を3点、「どちらかといえばあてはまる」を4点、「あてはまる」を5点とし、点数が高いほどその項目に対する肯定感が強いように配点した。逆転項目は「あてはまる」を1点とし、「あてはまらない」を5点とし、内容的に将来設計への肯定感が強い方が点数が高いように配点した。各下位尺度に属する項目の平均点をその尺度の得点とした。信頼性を表す α 係数は.78であり、尺度として十分な内的整合性をもつ。将来設計の尺度得点が3.5以上を高群、2.5以下を低群とした。高群は740名、低群は380名である。

将来設計と学習動機・学習意欲が関連するかを調べるために一元配置の分散分析を行い、将来設計の高群と低群では、学習動機、学習意欲の平均値が異なるかどうかを検討した。その結果を図9に示した。5つの学習動機と2つの学習意欲はすべて将来設計高群の方が0.1%水準で有意に高かった。特に「積極的関与」の差が大きく、高群では3.0であり、低群では2.18であった。「積極的関与」は4件法であるから、将来設計の高群は自分は学習意欲は高く積極的に学習していると考えており、将来設計低群ではあまり積極的に学習していないと考えている。すなわち、将来設計と学習に対する積極性は密接な関連性をもつことが分かる。また、学習動機もすべて将来設計高群で高いことから、学習に対する構えと将来に対する構えが関連し、学習への動機づけが高い人の方が将来設計もしっかりしていることが分かる。

全体では学習動機がすべて将来設計と関連していることが分かったので、次に学習動機のうちどれが特に将来設計に影響を及ぼしているのかを1年生と3年生に分けて詳しく検討する。また、将来設計だけでなく、現在の学生生活の充実にもどのように影響しているのかも調べる。

8. どのような学習動機が将来設計と学生生活の充実に影響するのか

学習動機が将来設計と現在の学生生活の充実にどのように影響しているのかを調べるために、「将来設計」と「学生生活の充実」を従属変数にし、5つの学習動機を独立変数にして重回帰分析を行った。「学生生活の充実」とは、「あなたの学生生活は充実していますか」という設問であり、「充実していない」「あまり充実していない」「どちらとも言えない」「まあまあ充実している」「充実している」の5件法で、1点から5点を配点し、充実している方が5点である。その結果を図10と図11に示した。

1年生、3年生ともに同じ結果であり、特に「特定課題志向」の学習動機が「将来設計」と「学生生活の充実」に影響していた。すなわち、興味ある分野があり、特に学びたいことば決まっている人は将来に対する設計もしっかりし、現在の学生生活も充実している。「職業・専門性志向」の学習動機も、「特定課題志向」ほどには大きな影響力はもたないが、高い人の方が将来に対する設計を行っている。しかし、わずかではあるが、「職業・専門性志向」と「経験関与的課題志向」は「学生生活の充実」に負の影響を与えている。なりたい職業や将来のことを考えて専門性を高めたいという動機は強すぎると目的が将来に焦点化され、現在の学生生活の充実に損なう危険性がある。また、「経験関与的課題志向」は日常的に接したことやふだん疑問に思ったことを勉強したいという学習動機であり、その気持ちが高いほど学生生活に充実が感じられないということである。大学の授業で扱う内容はあらかじめ決まったものであり、学生が個人的に自分の経験から見つけた課題とは異なっていることもあり、充実感を感じられないのかもしれない。

1年生

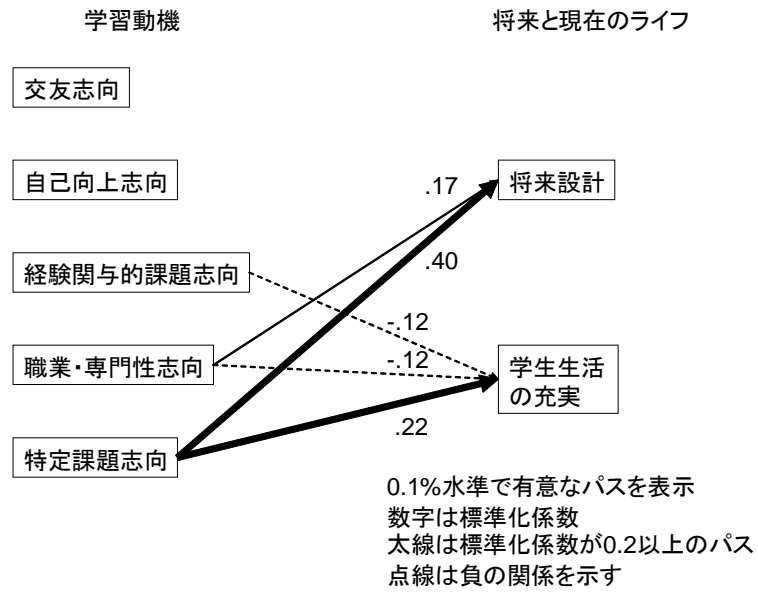


図10. 学習動機が将来と現在のライフに及ぼす影響(1年生)

3年生

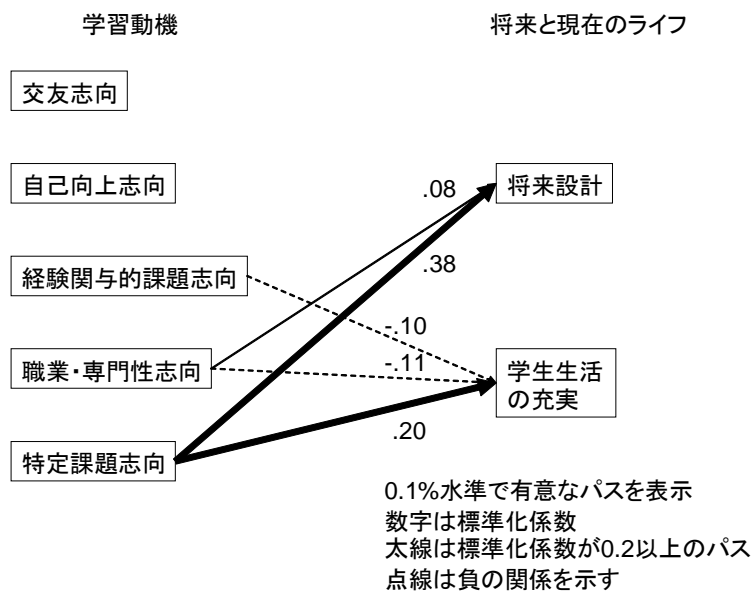


図11. 学習動機が将来と現在のライフに及ぼす影響(3年生)

9. どのような学習動機が授業・実験への参加時間数とその貢献度および勉強時間数とその貢献度に影響するのか

学習動機が、授業や実験へ参加する時間数、それが将来の仕事や人生設計に貢献する度合い、勉強時間数、それが将来の仕事や人生設計に貢献する度合いにどのように影響するのかを調べるために重回帰分析を行った。1年生の結果を図12に、3年生の結果を図13に示した。

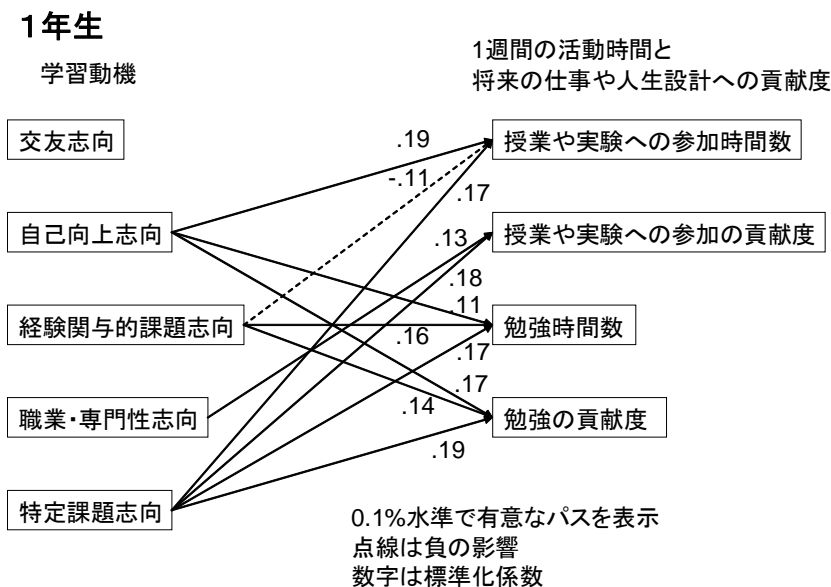


図12. 学習動機が授業等への参加、勉強時間およびそれらの貢献度におよぼす影響(1年生)

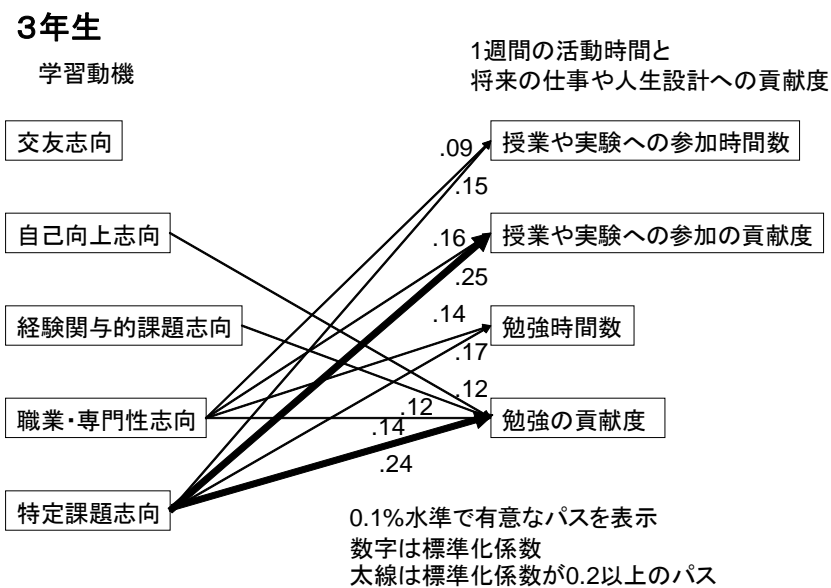


図13. 学習動機が授業等への参加、勉強時間およびそれらの貢献度におよぼす影響(3年生)

授業や実験へ参加する時間数は、「過去一年間に、あなたは次の活動にどのくらいの時間を費やしましたか。1週間の平均的な時間数として最も近いものを1つずつお知らせください」という設問の中の「大学で授業や実験に参加する」という項目への回答による。選択肢は「全然ない」「1時間未満」「1～2時間」「3～5時間」「6～10時間」「11～15時間」「16～20時間」「21時間以上」であり、順に1点から8点を与え、点数が高くなるほど時間数が多いように配点した。「授業や実験への参加の貢献度」とは、「過去1年間を振り返って、次の活動はあなたの将来の仕事や人生設計にどのくらい貢献したと思いますか」という設問の中の「大学で授業や実験に参加する」の項目への回答による。回答は5件法であり、点数が高くなるほど貢献度が高いように配点した。

勉強時間数は次の3項目「授業に関する勉強」「授業とは関係のない自主的勉強」「勉強のための本（新書や専門書）を読む」の平均を勉強時間とした。信頼性を表すアルファ係数は.73あり、十分な内的整合性があるので、勉強時間尺度として3項目をまとめて扱うことにする。これら3項目の将来への貢献度に関するアルファ係数は.63でそれほど高くないが、尺度として使用することは差し支えない程度であると判断した。

1年生、3年生ともに「特定課題志向」の学習動機が高いほど、授業や実験に参加し、授業や実験の将来への貢献度も高く、勉強時間数も多く、勉強の貢献度も高く認知されている。言い換えると、自分が学びたいことが決まっている人ほど授業・実験に多く参加し、その授業・実験は将来の仕事や人生設計に貢献すると学生は考えている。また、勉強に関しても同じであり、興味ある分野が決まっていて特に学びたいことがある人ほど、授業に関する学習であれ、授業とは関係のない自主的勉強であれ勉強し、勉強のための本も多く読む傾向があり、それらは将来の仕事や人生設計に貢献すると考えている。

1年生は「自己向上志向」が高い方が授業や実験に参加する時間数が多く、勉強時間とその貢献の度合いも高く評価されている。しかし、わずかではあるが、日常的に自分の経験と関連したものについて学びたいという「経験関与的課題志向」は授業・実験への参加時間数と負の関係にある。それでも「経験関与的課題志向」は勉強時間数とその貢献度の評価には正の影響を及ぼしている。すなわち、身近なことからの疑問点などを学びたいと考える学生はあまり授業や実験に参加しない傾向が窺える。授業や実験で扱う内容が経験に根ざした日常的なものとはかけ離れていると学生は感じているのかもしれないが、今後の検討が必要である。

3年生は「職業・専門性志向」が高い方が授業・実験に参加し、勉強時間も多し。また「職業・専門性志向」が高い方が授業・実験への参加時間と勉強時間が将来に貢献すると考えている。言い換えると、なりたい職業や専門性のために学習している人の方が授業・実験に参加する時間数と勉強時間数も多く、しかもそれらが将来の仕事や人生設計に貢献することを自覚している度合いが高い。

10. どのような学習動機がどのような能力向上とマインド形成に影響するのか

大学生活において身についた能力やマインドに関して、それが大学の授業（予習復習など授業外での学習を含む）で身についたと考える学生はどのような学習動機をもって学習しているのかを検討した。先ず、調査対象者全体について、5つの学習動機を独立変数にし、身についた能力やマインドの25項目の各項目を従属変数にし、25重回帰分析を行った。身についた能力・マインドの各項目ごとにどの学習動機が最も強く影響しているのかを調べ、同じ学習動機が影響している能力・マインドをひとつの尺度としてまとめた。

「交友志向」をもつ学生が身についたとする能力・マインドは『対人力・創造・挑戦』などであり、具体的な項目は下記の通りである。信頼性を表す α 係数は.84あり、尺度として十分な内的整合性をもつ。以下、「自己向上志向」をもつ学生は『教養・思考表現力』、「経験関与的課題志向」をもつ学生は『実践力』、「職業・専門性志向」をもつ学生は『知識応用・メディアリテラシー』、「特定課題志向」をもつ学生は『基礎学力・意欲』が身についたと結果が得られた。それぞれの能力・マインドの具体的な項目とアルファ係数を下記に示した。アルファ係数はそれほど高くない項目群もあるが、尺度として使用するには十分であると判断した。

図 14 に、調査対象全体の学生について、大学での授業で身につけた能力・マインドに影響する学習動機のパス図を示した。図 15 は 1 年生について、図 16 は 3 年生についてのパス図である。

大学での授業で身につけた能力・マインドの学習動機別の項目群

対人力・創造・挑戦 $\alpha = .84$ (主に「交友志向」の学習動機をもつ学生が身につけた能力・マインド)

対話の能力

日本語での口頭と筆記によるコミュニケーション能力

プレゼンテーション能力

他人との協調性

創造性

チャレンジ精神

教養・思考表現力 $\alpha = .69$ (主に「自己向上志向」の学習動機をもつ学生が身につけた能力・マインド)

専門外にわたる幅広い教養

分析を通しての批判的思考力

文章表現能力

実践力 $\alpha = .85$ (主に「経験関与的課題志向」の学習動機をもつ学生が身につけた能力・マインド)

情報の管理能力と技術

市民性と倫理的責任感

企業家精神

外国語での口頭と筆記によるコミュニケーション能力

問題解決能力

リーダーシップ能力

時間を有効に利用する能力

知的面での自信

自己理解

競争心

知識応用・メディアリテラシー $\alpha = .60$ (主に「職業・専門性志向」の学習動機をもつ学生が身につけた能力・マインド)

将来の職業に専門的知識を生かす応用力

数理的な能力

コンピュータ・インターネットの操作能力

基礎学力・意欲 $\alpha = .71$ (主に「特定課題志向」の学習動機をもつ学生が身につけた能力・マインド)

専門分野で研究するための基礎的な学力と技術

学習に対するやる気

忍耐強く継続して物事に取り組む力

全体

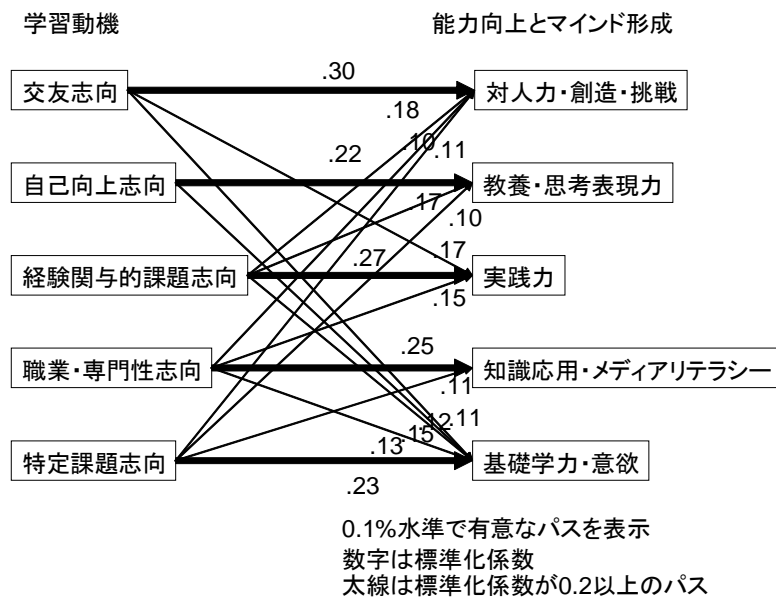


図14. 学習動機が能力向上とマインド形成に及ぼす影響(調査対象者全体)

1年生

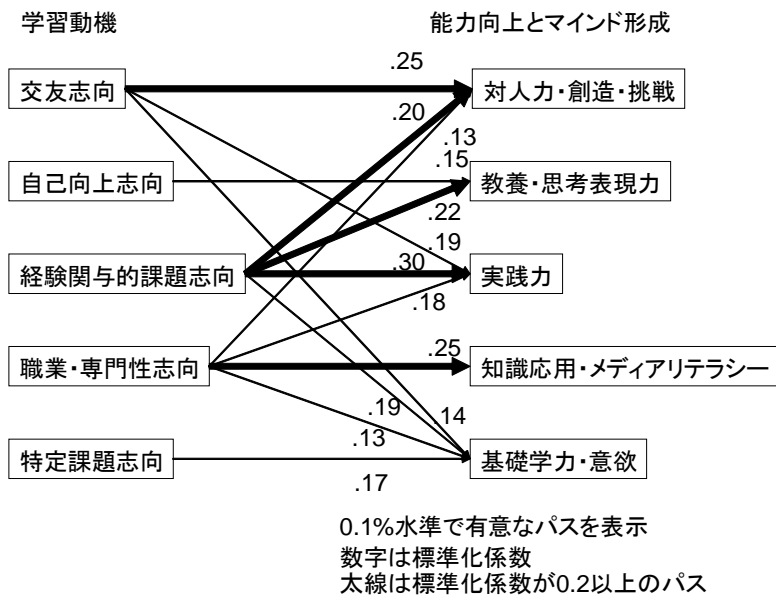


図15. 学習動機が能力向上とマインド形成に及ぼす影響(1年生)

3年生

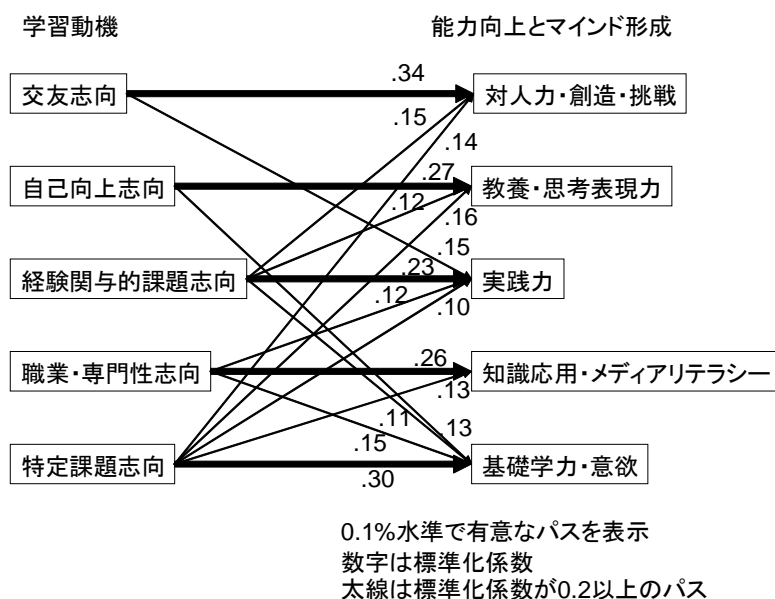


図16. 学習動機が能力向上とマインド形成に及ぼす影響(3年生)

3年生は全体の傾向と同じであり、以下では3年生がもつ学習動機と身につく能力について検討する。

『対人力・創造・挑戦』は「対話の能力」「日本語でのコミュニケーション能力」「プレゼンテーション能力」「他人との協調性」「創造性」「チャレンジ精神」の6項目から成り、これらが身についたとする学生は主に、いろいろな人と出会い、新たな友人を作ることができ、楽しそうな場だから学習するなどの「交友志向」の学習動機をもっている。『対人力・創造・挑戦』の能力は、他者との共同作業や活動、授業での討論・発表等を通して獲得されることが多いと考えられることから、豊かな人間関係の中で授業が行われるとこれらの能力が身につくやすすいであろう。現在は特にコミュニケーション力の不足が問題となっていることから、対話の能力を始め、対人力をつけるためには、学生が人間関係を重視した学習を求めるような学習動機を強くもつように支援することが必要である。

『教養・思考表現力』は「専門外にわたる幅広い教養」「批判的思考力」「文章表現能力」の3項目から成り、視野を広げたい、自分を高めたいと考えて学習する「自己向上志向」の学習動機の高い学生が『教養・思考表現力』が身についたと考えている。幅広い教養をもち、与えられた情報を鵜呑みにしないで自分で考える批判的思考力、そして自分が考えるところを文章に表現する能力は、学習することによって視野が広がり、多様な視点を獲得し、自分が成長していくと学生自身が自覚している方がよく身につくことが分かった。学ぶことによって学生自身が自分作りし、向上していることが実感できるとさらに「自己向上志向」の学習動機が強まっていくであろう。

『実践力』は「情報の管理能力と技術」「市民性と倫理的責任感」「企業家精神」「外国語でのコミュニケーション能力」「問題解決能力」「リーダーシップ能力」「時間を有効に利用する能力」「知的面での自信」「自己理解」「競争心」の10項目から成り、実際に社会に出てから役立つ能力である。これらの能力が身についたという学生は日常的に接したことに関心をもち、ふだん疑問に感じたことや日常生活で経験していることについて学びたいと考え、身近な経験から学びたい課題を設定している「経験関与的課題志向」の学習動機が高い。実際に社会に出てから有用である能力を身につけるためには、学生の日常生活に関連するような学びを設定する必要がある。実践に役立つ種々の能力は、学生が実際に経験しているような身近な課題を学習する過程で育っていくと考えら

れる。

『知識応用・メディアリテラシー』は「将来の職業に専門的知識を生かす応用力」「数理的な能力」「コンピュータ・インターネットの操作能力」の3項目から成り、なりたい職業や資格のため、あるいは高い専門性を身につけたいという「職業・専門性志向」の学習動機をもつ学生が身についたと考えている能力である。将来の職業や専門性のために学習している学生が「将来の職業に専門的知識を生かす応用力」が身についたとしていることに関しては、学習をすることに対する動機がそもそも職業を念頭においたものであるから当然とも言えよう。そのほかには、「数理的な能力」も職業と専門性と結びついて学生に認知されている。また、職業を考えている学生はこれからの職業的能力のひとつとしてパソコンの操作能力も身につけている。

『基礎学力・意欲』は「専門分野で研究するための基礎的な学力と技術」「学習に対するやる気」「忍耐強く継続して物事に取り組む力」の3項目であり、特に学びたいものがあり、興味のある分野を学びたいという学習領域が明確な「特定課題志向」の学習動機が高い学生が身についたと考えている。大学での専攻が興味をもてるものであり、その専攻が自分が学びたいものである場合には、そこでの基礎学力と技術を身につけ、しかもやる気と継続力も備えている。やる気をもって大学の授業内容をきちんと習得し、継続して取り組む力を育てるためには学生がなんとなく授業にでているという姿勢ではなく、学びたいことが明確であり、授業でそのニーズが満たされる必要があるであろう。

1年生が特に3年生と異なる点は、「経験関与的課題志向」の学習動機が『実践力』のみならず、『対人力・創造・挑戦』と『教養・思考表現力』の獲得にもかなり影響していることである。1年生の場合は日常的に接していることに関心を持ち、ふだんの生活の中から疑問に感じたことを取り上げ、自分の経験と知識が融合すると興味がわくという「経験関与的課題志向」の学習動機がさまざまな能力の獲得に役立っている。高校までの学習が教科書主体の学習で知識習得が主であったが、大学では能動的に学習に参加することが求められることが多い。そのような授業で社会にでたときに有用な能力を身につけるためには、学生の経験を重視し、理論と実践の橋渡しができるような配慮が必要である。

1.1. 各学習動機が及ぼす影響についてのまとめ

本稿では、大学で学ぶ理由を5つの学習動機に分類した尺度を用いて、これらの学習動機が将来への準備と大学での学習にどのように影響するのかを検討してきた。上記の分析では、各学習動機とそれらが影響を及ぼす要因との関連を調べてきたが、その主な結果をまとめて下記の表1に示した。以下で、まず、各学習動機の平均値の特徴、長所と短所について概要を述べ、次に各学習動機について詳説する。

平均値をみると、一番高い学習動機は自分を高め、視野を広げたいという「自己向上志向」である。学習することによって自己を向上させることを目指しているのだから、できるだけ長く勉強を続けたいという学習への継続意欲が高い。2002年からの5年間で平均値が上昇しているものは「交友志向」のみで、この学習動機はいろいろな人と出会えるからというものであり、人とのつながりを重視するが、学習への積極的な関与と継続意志とは関連しない。日常生活で見たたり聞いたりを学びたいという「経験関与的課題志向」と特に学びたいものがあるという「特定課題志向」の2つの学習動機は学習内容に関連する動機であり、この2つと将来の職業を考える「職業・専門性志向」は平均値が低下している。すなわち、学習そのものへの意欲と職業や専門性のための意欲はこの5年間で低下していると言える。また、5年間の経年変化だけでなく、特に学びたいものがあるという学習動機と職業や専門性をめざす学習動機は1年生よりも3年生の方が低く、学年が上昇するにつれてこれらの意欲も低下している。

表1. 学習動機別の平均値, 長所, 短所

学習動機	平均値について	長所	短所
交友志向	平均値がかなり高い 5年間で上昇	【全体】 主に「対人力・創造・挑戦」育成	【全体】 学習への積極的関与, 継続意志と関連しない 将来設計につながらない 「教養・思考表現力」「知識応用・メディアリテラシー」を育成しない
自己向上志向	平均値が非常に高い	【全体】 学習の継続意志を高める 【1年生】 授業・実験参加時間数, 勉強時間とその将来への貢献度を増加させる 【3年生】 主に「教養・思考表現力」育成	【全体】 将来設計につながらない 「対人力・創造・挑戦」「実践力」 「知識応用・メディアリテラシー」を育成しない
経験関与的課題志向	2002年からの5年間で低下	【全体】 学習の継続意志を強める 【1年生】 特に1年生では学習の継続意志を強める 勉強時間数とその将来への貢献度を増加させる 主に「実践力」「対人力・創造・挑戦」「教養・思考表現力」育成 【3年生】 主に「実践力」育成	【全体】 将来設計につながらない 学生生活の充実が多少低下 「知識応用・メディアリテラシー」を育成しない 【1年生】 授業・実験への参加時間数が多少減少
職業・専門性志向	2002年からの5年間で低下 3年生では1年生よりも低下	【全体】 将来見通しの理解・実行群>理解・不実行>不理解 将来設計を多少促す 主に「知識応用・メディアリテラシー」育成 【3年生】 授業・実験参加時間数とその将来への貢献度, 勉強時間とその将来への貢献度を増加させる	【全体】 「教養・思考表現力」を育成しない 学生生活の充実が多少低下 学習の継続意志と関連しない
特定課題志向	2002年からの5年間で低下 3年生では1年生よりも低下	【全体】 授業・実験参加時間数とその将来への貢献度, 勉強時間とその将来への貢献度を増加させる 学生生活の充実を促す 学習への積極的関与, 継続意志を高める 将来見通しの理解・実行群>理解・不実行>不理解 将来設計を促す 「基礎学力・意欲」	【全体】 「実践力」を育成しない

各学習動機がもつ長所として、大学での授業・実験への参加時数、勉強時間、それらの将来への貢献度を促進しているかどうかをみると、全体としては「特定課題志向」の影響力が強い。特に学びたいものが決まっている学生は授業・実験によく参加し、勉強もよくやり、それらが将来に役立つと考えている。学年によってどの学習動機が影響するのかが異なり、1年生では自己を向上させたいと考えている人、経験したことを学びたいと考えている人が授業参加時数あるいは勉強時間数が多い。3年生では職業と専門性のために学習したいと考えている人が授業に参加し、よく勉強する。

将来との関連をみると、全体としては、将来の見通しを理解し、実行している人は「職業・専門性志向」と「特定課題志向」の学習動機が強い。職業と専門性を考えて学習し、特に学びたい内容をもっている人は将来設計をもち、将来の見通しを理解し、実行している。

このように「特定課題志向」は学習への取り組みと将来設計の双方を促進するというよい影響力をもつことが分かるが、短所として、獲得する能力が「基礎学力・意欲」であり、社会にでてから必要とされる「実践力」を獲得できないことが挙げられる。いいかえると、専門分野で研究するための基礎的な学力と技術や学習に対するやる気を身につけることができるが、問題解決能力、リーダーシップ能力、市民性と倫理的責任感など実際に仕事をしていく上で不可欠な「実践力」は、学びたい内容が決まっているだけでは習得できない。これらには「経験関与的課題志向」の学習動機が影響することから、学生が実際に経験したことから課題を見つけてそれを解決していく学習が必要である。この「経験関与的課題志向」は将来設計につながらないという短所をもつが、1年生では勉強時間数を増やし、学習への継続意志も強化し、「実践力」だけでなく、「対人力・創造・挑戦」「教養・思考表現力」などさまざまな能力を獲得させる。大学に入学したばかりの1年生に対しては、高度な専門的理論よりも学生の経験を重視し、身の丈にあった課題を設定することも重要である。

将来の見通しを理解し、実行し、将来設計を促すために役立つ「職業・専門性志向」は短所として学生生活の充実が多少ではあるが低下することが挙げられる。学生の関心が将来のことに集中しすぎると現在の生活がおろそかになる危険性がある。また、「職業・専門性志向」の短所としてできるだけ長く勉強したいと考え常に学びたい気持ちがあるという学習継続への意欲とは無関係であることも挙げられる。将来なりたい職業のために勉強するという意識の下には、なりたい職業につくことができたなら目的を達成したのもう勉強しないという意識が潜む可能性もあり、その場合は職業につくためには勉強するが就職後や資格を取得した後は勉強しないという状況もあり得る。なりたい職業や専門性のために学習するだけでなく、継続意志を強める役割をもつ自分が向上するのだという学習動機や自分の経験の中から疑問を解決するような学習動機も必要である。

次に各学習動機に関して詳しく述べる。

「交友志向」は学習動機の中では「自己向上志向」に次いで平均点が高い。この学習動機はいろいろな人と出会えるから、新たな友人を作ることができるから、楽しそうな場だからというような理由で学習しているものである。2002年からの5年間で、上昇したものはこの学習動機だけであり、他の学習動機は低下か変化なしである。人間関係を求める学習動機は、授業やその内容を自分のものにしようという意欲ではないが、授業で身につけた能力として、「対人力・創造・挑戦」がある。具体的には、対話の能力、日本語でのコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、協調性、創造性、チャレンジ精神である。これらは大学で学ぶ一般教養や専門的知識とは異なるが、社会にでてから必要とされる能力である。最近の若者はコミュニケーション能力が不足していると言われるが、対人力・創造・挑戦する力は、人間関係を求める学習動機が高いと身につけやすいと言える。5年間の経年変化の中で、人間関係の豊かさを求め楽しそうな場だからというこの学習動機が増加していることは、日常の世界で人との交わりが少なくなっているからこそ、交友関係を重視する傾向があるのかもしれない。子どもの数が多く、親族や地域で多様な人との出会いがあった時代には、人間関係は自然発生的なものであり、学習する動機としては過去においては現在ほど意識されなかったかもしれない。しかし、現在では「交友志向」の学

習動機が増加しているため、学生が求めている、人との出会いがあるような授業を用意し、人と対話し、協力し、創造し、チャレンジしていく能力を身につけてもらうことも大学の責務であろう。

「自己向上志向」は学生がもつ学習動機の中で、特に平均点が高いものである。視野を広げたい、自分を高めたいと自己の向上をめざして学習している学生は、将来にわたって学習を継続しようとする「継続意志」が強く、1年生では、現在のライフに関して授業・実験に参加する時間数が多く、授業や実験への参加が将来の仕事や人生設計へ貢献する度合いも高く認識している。また、この学習動機が高い1年生は授業に関する勉強、授業に関係のない自主的な勉強、勉強のための本（新書や専門書）を読む時間も総体的に多く、それらの勉強がやはり将来の仕事や人生設計に貢献すると考えている。1年生においては学習が自分を形成していくという自覚が授業への参加や実際の勉強することを促している。高校までの教科書の知識の習得をめざす授業と異なり、入学後早い時期に大学での学習と自己形成が結びついた学生は授業参加と勉強に熱心になるのであろう。また、学ぶことによって自分を向上させようとする学生は幅広い教養、批判的思考力、文章表現能力が大学の授業で身についたと考えている。教養はまさしくその人を作るものであり、批判的思考力もその人独自の視点を獲得することから始まり、自分の考えを文章で表現することも、自己の考えの表出である。初年時教育において学びが自己形成に役立つことが実感できるとその後の学習も実り豊かになるであろう。

「経験関与的課題志向」は日常的に接したことに興味をもち、ふだん疑問に感じたことを勉強したいと考え、自分の経験と知識が融合すると興味がわくから学びたいという学習動機である。自分の経験に根ざして学びたい課題を見つけているこの学習動機は2002年からの5年間でやはり低下している。1年生3年生ともにこの学習動機が高い方が学習を継続したいという意志が高く、特に1年生の方が継続する意志への影響力は強い。自分が実際に経験したことから学びたいと思う学習動機なので、主体性が強いと、学習継続への意欲も高いのであろう。この学習動機が高い人が身についたという能力は3年生では「実践力」であり、具体的には情報の管理能力と技術、市民性と倫理的責任感、企業家精神、外国語でのコミュニケーション能力、問題解決能力、リーダーシップ能力、時間を有効に利用する能力、知的面での自信、自己理解、競争心である。特筆すべきは1年生ではこの学習動機が高い人は「実践力」のほかに「対人力・創造・挑戦」「教養・思考表現力」も身についたとしていることである。多くの能力を身につけるためには1年生では、純粋の学問体系だけでなく、実際の経験や身近な問題を取り上げることが重要であると言える。

「職業・専門性志向」は「特定課題志向」と同様に、1年生と3年生を比較すると3年生の方が有意に平均点が低く、2002年からの5年間でも低下している。特定の課題を学習しようとする「特定課題志向」の学習動機もなりた職業のためや高い専門性を身につけたいと考えて学習する「職業・専門性志向」の学習動機も両方とも低下し、大学での勉強への意欲が弱まってきている。しかし「職業・専門性志向」の学習動機は「特定課題志向」と同じく、将来見通しの理解・実行群では理解・不実行群あるいは不理解群よりも有意に平均点が高い。授業・実験参加時間、勉強時間、それらの将来への貢献は1年生では「自己向上志向」が影響力をもったが、3年生では、この「職業・専門性志向」の学習動機が影響力をもつ。1年生では自分のために学習し、3年生では将来を見据えて学習している人の方が授業への参加時間や勉強時間が多く、それらが将来に対して貢献していると考えている。「職業・専門性志向」の学習動機が高い人は「知識応用、メディアリテラシー」の能力が身についたとしている。具体的には将来の職業に専門的知識を生かす応用力、数理的な能力、コンピュータ・インターネットの操作能力である。最近の大学生は分数の計算もできないと言われることもあるが、数理的な能力は職業上必要であると学生たちは判断している。

「特定課題志向」は特に学びたいものがあり、興味ある分野を学びたいという学習動機で、この学習動機が強い学生は1年生、3年生ともに積極的に学習していると自己評定し、将来も学習を継続しようと考えている。そして、この学習動機が高い学生は1年生3年生とも将来の見通しの実現に向かって何をなすべきか理解し、実行

し、将来設計があり、現在の学生生活も充実し、授業・実験への参加時間、授業に関する勉強、授業に関係のない自主的な勉強、勉強のための本（新書や専門書）を読む時間が多く、それらの将来への貢献度も高いと認知している。身についた能力としては「基礎学力・意欲」で具体的には専門分野で研究するために基礎的な学力と技術、学習に対するやる気、忍耐強く継続して物事に取り組む力である。以上のことから、「特定課題志向」の学習動機が高いと、大学での授業に熱心に取り組み、勉強し、専門的な学力や技術を身につけ、やる気や継続力もあり、同時に将来への準備もよくしていることが分かる。このように大学での学習にとって好ましい学習動機ではあるが、1年生と3年生を比較すると平均値は3年生の方が有意に低い。1年生のときには、特に学びたいものがあったとしても、学年が上がると興味が薄れてしまい、学習動機が低下している。また2002年からの5年間でみるとやはり低下している。学習そのものへの意欲が経年変化の中で低下しており、さらに大学入学後も低下するという事態に対して、学生の学ぶことへの意欲を増加させるべく対策を講じる必要がある。

以上みてきたように、学習動機の5つの下位尺度ごとに特徴があり、影響力が強い時期も異なることが分かった。全体的には学生が意欲的に学習に取り組み、学びを将来のキャリアに役立てるために、自分が学びたいものを明確にする「特定課題志向」の学習動機が役立ち、キャリア実現のためにはなりたい職業や資格や高い専門性をめざす「職業・専門性志向」の学習動機をもつことも有用である。しかし、このふたつの学習動機だけでは十分でなく、各学習動機の特徴を考慮して、必要な学習動機を強める方向で学生に働きかけていくと学習を継続しようとする継続意志が強まり、さまざまな能力を身につけることができるであろう。